

研究の概要

研究主題

主体的に学び、豊かに表現し、
考えを深める子どもの育成

目指す子どもの姿

- ・根拠を明らかにした自分の考えをもち、表現し合うことを通して、考えを深める子ども
- ・関わり合いを通して自分や相手のよさを認め合い、共に伸びようとする子ども

1 研究主題設定の経緯

(1) 児童の実態

素朴で明るく、他を思いやる優しい児童が多い。また、新しい生活様式において制限された中での学校行事や地域の伝統行事等であっても、それらに積極的に参加し、身近な物事への興味をもったり、周りと協力し合い楽しく活動したりする経験を多くの児童がしている。一方、多様な困り感を抱えている児童が多く、ユニバーサルデザインによる授業改善や個に応じた支援が求められている。また、学年が上がるにつれ自己有用感が低くなる傾向や、自分のよさについて自信をもつことができない児童もいることなどが特徴として挙げられる。

学習面では、与えられた課題に積極的に取り組んだり、自分の考えを積極的に発表したりすることができる児童が多い。一方で、苦手な教科に対して、考えることを諦めたり、自分の考えを発表するだけで満足してしまったりする児童も比較的多い。粘り強く取り組み、友達の考えから新たな課題を見つけ、より深めようとする点において課題がある。

また、一人1台端末を始めとするICT機器を用いた学習は、とても意欲的に取り組むことができ、学年に応じた情報活用能力を徐々に高めてきている。一方で、コンピュータなどのICT機器を活用することの良さを実感している児童があまり多くないことが質問紙等から明らかになっている。

(2) 昨年度の研究から

昨年度の研究

主題「主体的に学び、豊かに表現し、考えを深める子どもの育成」

○「よりよく生きる力」として

- ・特別活動や道徳で一人一人の自己有用感を高める。
- ・豊かな人間関係を築き、よりよく生きる力を身に付けることで学級の基盤をつくる。

○「確かな学力」として

- ・ユニバーサルデザインの視点からの授業改善。
- ・「花館小教えのきほん」に基づいた探究型授業の実践を継続し、主体的・対話的で深い学びを視点とした授業改善を行う。そのために次の2点を重点事項として共通実践を行う。

◇「子どもの心をゆさぶる魅力ある導入の工夫」

◇「交流タイムの充実」

児童への学習アンケート、教師への指導についてのアンケートをもとに昨年度の実践を検証をしたところ次のような結果が得られた。

「児童の言葉を生かしたためあての設定」「課題の見通しをもたせる工夫」の項目は児童、教師共に高評価であった。児童の言葉やつぶやきを拾い上げたりつなげたりしながら、その時間のねらいをためてに表すことなどを日々実践してきたことが児童の実感を伴って成果として表れたものと考えられ、導入部で工夫をすることで課題意識づくりへとつなげることができていることが分かった。

それに対して、「比べながら聴く つなげて話す（交流タイム）」については児童、教師共に評価が低かったという点で一致している。自分の考えは話すことができても、友達と比較する、友達の考えを受けて自分の考えに生かすという点が十分でなかったと考えられる。自分の考えを分かってもらえるように話す（書く）こと、相手に分かってもらうために根拠を明らかにして話す（書く）といった手立てを充実させていく必要がある。

また、「振り返り」の項目については児童は高評価であるにもかかわらず、教師の評価は最も低いという特徴的な結果が得られた。振り返りの時間を確保し、パターン化してきたことで、振り返りをするまでが学習という意識が児童に定着しており、「振り返りを書いた」という自覚が児童の評価につながったと考えられる。一方で、教師の評価が低いのは、振り返りを書かせはしたが、その内容が十分でないと感じられたことが理由として挙げられ、どのような振り返りを書かせたらよいのか、視点をより明確にする必要性を感じているからと考えられる。

(3) 今年度の研究

児童の実態と昨年度までの研究を踏まえ、昨年度までの取組は十分な成果を挙げてきており、その方向性を今年度も継続することが望ましいと考える。

そこで、今年度も「よりよく生きる力」「確かな学力」の二点を柱として、「主体的に学び、豊かに表現し、考えを深める子どもの育成」という研究主題は継続して、研究実践をしていく。

その達成された具体的な姿として、目指す児童の姿を設定した。充実した学び合いの場で児童が自分の考えをもつだけで止まらず、相手の意見と比較したり、新たな課題を見つけ、自分の考えをより深めたりするためには、根拠を明らかにすることが必要と考えた。そこで、「根拠を明らかに」をキーワードとして学び合いの場を充実させる手立てを講じる。また、学び合いや振り返りの場を充実させ、それらを共有し合うことで、次への課題意識やより深い学びにつながれた自覚をもてるようにしたい。そのためには、自分の思いだけではなく友達の影響や感想と比較することが大きな効果をもたらすはずである。そこで、友達と「関わり合う」をキーワードに手立てを講じていく。「根拠を明らかに」と「関わり合う」とが学びの相乗効果を生み、主題の実現につながるものと考え、今年度の研究のキーワードに据えていく。

また、今年度は、GIGAスクール構想事実上の2年目であることから、「まずは使ってみる」でよしとされた昨年度より一層のICT機器等の活用が求められる。とりわけ、児童に配付されている一人1台端末とそれに導入される学習支援ソフトの効果的な活用を図る必要がある。まずは教師が積極的に研修を積み、児童の実態に合わせて、各教科、領域の学習場面で効果的な活用方法を模索しながら、児童が学習でも活用できているという実感を得る学習活動となることを目指したい。

これらを踏まえて、主題を実現するために、PDCAサイクルを機能させ、組織的に校内研修を進めていきたい。

2 主題達成のために

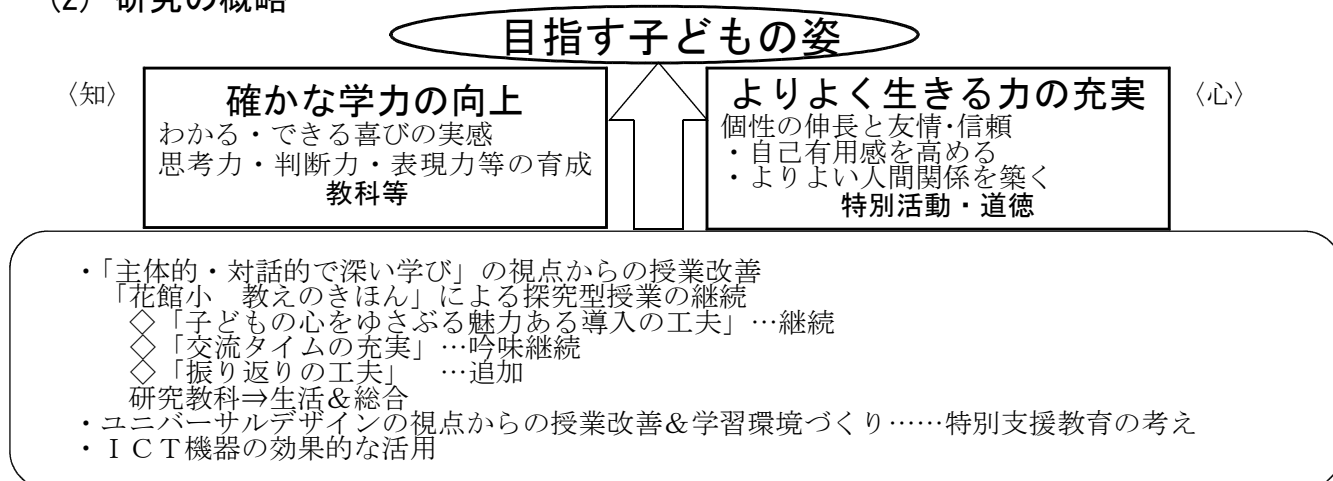
(1) 仮説

研究主題達成の指標となる目指す児童の姿の具現化のために、次の2つの仮説をもとに実践を行う。

仮説① 「花館小教えのきほん」を基にした探究型授業において、子どもの心をゆさぶる魅力ある導入の工夫や学び合いの場の充実を図ることで、課題解決への関心を高め、互いに学び合うことのよさを感じ取らせ、主体的に学び、豊かに表現する姿につなげることができるであろう。また、振り返りの充実を図ることで、自らの学びの深まりの自覚や新たな課題意識につながり、次への意欲をもつ子どもを育成できるであろう。

仮説② 学習を支える基盤として、特別活動や道徳の時間を充実させることで、お互いを認め合ってよりよい人間関係を築き、他と学び合う心を育むことができるだろう

(2) 研究の概略



3 研究の具体

(1) 研究の柱

I 確かな学力の向上

楽しく「分かる・できる」学習で「思考力、判断力、表現力等」の育成

「花館小 教えのきほん」に基づく主体的・対話的で深い学びの視点や、ユニバーサルデザインの視点からの授業改善

II よりよく生きる力の充実

特別活動及び道德の時間の充実

学習を支える基盤として、一人一人が自己を見つめ、他と学び合う心を育む

『学びのユニバーサルデザイン』をキーワードとした教育活動の充実

- ① 特別支援教育の考えを生かし、すべての学級で“学びのユニバーサルデザイン”を意識した授業改善に努め、授業の質の向上を図る。授業においては「焦点化、視覚化、共有化」を図り、児童一人一人にとって分かりやすい授業を目指す。特に算数においては、児童のノートと板書がリンクするように教材研究の段階で「教師のノート作り」に取り組む。

そして各教科において、言語活動の充実を通して「思考力、判断力、表現力等」の育成を図り、確かな学力を身に付けさせる。児童の思考力・判断力・表現力等を育むために、基礎的な音読や詩の暗唱、国語辞典の活用を図り、高学年においては、記録・説明や論述といった知識・技能を活用する学習活動を行い、言語の能力を高めるようにする。

家庭学習では、基礎・基本のAメニューだけでなく、活用・書く力を付けるためのBメニューにも取り組む。その際、子ども新聞等を積極的に活用し、感想や自分の考えを書く習慣を付けていくようにする。

また、学び合いの段階における「交流タイム」や「教師による発問の工夫（ゆさぶりや問い返し）」を重視した共有化に焦点を当て、効果的なインタラクション（相互作用）によるより質の高い授業を目指す。そして、授業のゴールの段階におけるねらいを達成した子どもの姿を具体的に捉えつつ、リフレクション（自己内省）を意識したまとめや振り返りの表現を確かに見取ることを共通実践していく。

- ② 本校の道德教育の重点指導事項「個性の伸長」「友情・信頼」に沿って段階を追った指導を重ね、『自主・自律』『よりよい人間関係』を目指す。また、本校の重点指導事項について、特別活動が人間関係形成力を育成する大切な教育活動であること、道德的实践を担う大切な教育活動であることを踏まえ、「花館小 教えのきほん」に掲載された学級活動の共通実践事項を全学級で計画的に積み重ねていく。そして、学級活動で培った学級集団の人間関係や一人一人の心の成長を基盤に据え、自己の生き方について考えを深め、生きる自分への自信をもたせる。さらに、道德の教科化を踏まえ、道德教育の要である「道德の時間」の充実を図り、さらに特活で道德的实践力を育む。

- ③ 初任者研修については、校内研修が円滑に実施されるように、校内の協働的な指導体制を整備し、全教職員の共通理解の下、実践的な研修を計画的・継続的に行うようにする。また、「初任者を学校全体で一人前の教員に育てる」という使命感や、「初任研は、自分たちの研修の場でもある」という自覚を全教職員がもち、全教職員が一致協力して初任者の成長を支えようとする雰囲気大切に作る。

- ④ 関係各位の指導の下、先進校視察及び各種研修会に積極的に参加し、その成果を共有し、教育活動に生かす。

(2) 共通実践事項

I 確かな学力の向上

① 主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善

- 単元のねらい、本時のねらいの明確化と共有化
- 「花館小 教えるきほん」に基づく探究型授業の実践の継続
- ◇子どもの心をゆさぶる魅力ある導入の工夫
 - 子どもの発言を生かしたためあてや課題の設定
 - 見通しをもたせる工夫
 - 発達段階に応じた課題提示や I C T 機器、掲示物等の活用
- ◇学び合いの場の充実
 - 自力思考の時間の確保
 - 根拠を明らかにして話す（書く）スキル
 - 思考の可視化（思考ツールの活用：ホワイトボード、付箋、I C T 機器等）
 - 「交流タイム」（全体での学び合い）の充実
 - ・聴く姿勢の徹底
 - ・話型、ハンドサインを活用した発表をつなげる場の設定
 - ・比べながら聴く→反応する→つなげて話す習慣付け
 - ・学びを深めるための意図的指名やゆさぶり、問い返し等の発問の工夫
 - ・子どもの発言を生かしたまとめ
- ◇振り返りの充実
 - 考えの広がりや深まりを自覚したり、次の課題につなげたりできる振り返りの視点を示す
 - よい振り返りの共有

② ユニバーサルデザインの視点からの授業改善

- 授業の焦点化、視覚化、共有化
- 板書と児童のノートをリンクさせた教師のノート作り

③ 基礎・基本の定着を目指した効果的な学習活動の設定

- スキルタイムを活用した基礎・基本の定着
 - ・金曜日の朝活で漢字、ことわざ、文法、短作文、テストの復習等
- 家庭学習の充実
 - ・Aメニュー（基礎・基本）とBメニュー（活用、書く力を付けるため）の継続
 - ・強調週間（年4回）6月、9月、11月、2月
 - ・担任以外からのコメント
 - ・一人勉強コーナーへのノートやコピーの掲示、学年報での紹介、学習公開日のノート展示

④ I C T 機器の効果的な活用

- 一人1台端末、学習支援ソフトの児童の実態に応じた効果的な活用
 - ・大仙市版 情報活用能力育成系統表を基にした取組
 - ・家庭学習（端末の持ち帰り）での活用を見据えた、具体的な使用
- G I G A スクールサポーターと連携した授業
- 授業における I C T 機器の活用についての提案
- 具体的な活用を目指した研修計画

II よりよく生きる力の充実（特別活動、道徳の充実）

- 学習を支える基盤として、一人一人が自己を見つめ、他と学び合う心を育む
 - ・互いの違いを認め合える学級集団づくり
 - 学級活動（話し合い活動の充実）で自己有用感を育む
 - ・全教育活動に関わる道徳教育の実践と道徳の授業実践研究
 - 別業による計画的な指導 考え・議論する道徳の時間
 - ・道徳ファイル特活ファイルを活用した子どもの変容の見取り
 - 年間を通じて子どもの変容の記録を積み重ねるファイル
 - ・道徳コーナーを活用した、学習での考えや思いの紹介
 - 学年部で道徳の時間や重点内容項目に関する紹介をする
 - ・道徳の授業公開
 - 1年のうち1回は学習公開日で公開する

